令和4年6月26日
茅ヶ崎市文化財保護審議会
下寺尾遺跡群等保存・活用部会
議題4　資料2

史跡 下寺尾西方遺跡の本質的価値 （2019 年 11 月部会での指摘を反映した修正資料）

1 南関東における弥生時代中期の環濠集落として最大級の規模を有する。

下寺尾西方遺跡における環濠集落は、規模と形態の違う 2 本の環濠などによって囲繞され変遷しながら営まれる集落である。このうち外側の環濠に伴う集落の規模は、南関東(神奈川県・東京都・埼玉県・千葉県)地域において、最大級の面積を有する規模であり、弥生時代中期後半の環濠集落を考える上で重要である。また当初の環濠集落から拡張された集落への拡大は 2 倍以上であり、新たな環濠を構築し集落面積を広げるための土木技術の確保や労働力の調達などを可能とする力の存在も窺うことができ、集落の拡張を考える資料として重要である。

下寺尾西方遺跡における環濠集落の形成が社会的緊張によるものなのか、あるいは集団の結束を意識したものなのか単純には確定できないものの、集落建設や拡張という行為が計画的にかつ組織的に行われたことは想像に難くない。したがって下寺尾西方遺跡における環濠集落は、規模や集落拡張が大きい一事例ということだけではなく、上記の内容や背景を知るためにも必要であり、当地域での弥生時代中期後半における社会状況を考える際に欠かせない遺跡として価値を有する。

~~2~~4 相模川東岸南部下流域における中心的な集落

下寺尾西方遺跡は、相模川流域の東岸南部に位置するが、周辺には弥生時代中期後半の遺跡が数多く所在している。下寺尾西方遺跡を中心とした 5km 圏内に 10 ヶ所が認識されているが、北部の台地に立地し環濠を有するものや南部低地の砂丘上に立地し環濠を有するものなど注目される遺跡も見受けられる。

こうした相模川流域における環濠集落については、大規模な環濠集落を中心に社会的なまとまりを形成しており、下寺尾西方遺跡を周辺における集落規模と比較すると、他よりかなり大きな規模を有していることから中心となる遺跡と評価される。また台地や低地を含む活動範囲の面からも中心部分に位置しており、交流に必要な陸路や川など活用も容易であったことが推測できる。それに加えて、鉄斧や磨製石斧など木工具の存在や大型勾玉の未成品などの出土から石器製作機能を持つ生産遺跡としての側面も有しており、物流の拠点となっていた可能性も想定される。

これらのことから、下寺尾西方遺跡は弥生時代中期後半における相模川東岸南部の中心的な集落であると考えられる。

~~3~~2 弥生時代中期後半における環濠集落の形成から~~廃絶の~~終末に至る変遷を知ることができる。

下寺尾西方遺跡から出土する弥生時代の遺物は、中期後半の「宮ノ台式期」に該当することから、この時期に限定される集落であることが明らかになっており、限定された時期に当該地を選地し、集落を形成し活動をはじめ、その後拡張を行い継続して集落を営み当該期の中で終末を迎えるという変遷を知ることができる。また一遺跡で宮ノ台式期全般に亘るという例は少なく、このことは弥生時代中期後半、宮ノ台式期の環濠集落を考える上で貴重である。

さらに、下寺尾西方遺跡における弥生時代集落は後期に継続して営まれることなく終末を迎えこの地より人の活動が消えるが、一方で下寺尾西方遺跡周辺では、弥生時代後期前半の遺跡が多数発見されており、弥生時代中期後半から後期への当地域における社会の変化を考える際にも下寺尾西方遺跡は重要な役目を果たすものと思われる。

~~43~~石器文化の終末と鉄器文化の開始期波及を知ることができる。

下寺尾西方遺跡からは土器類とともに、鉄斧 2 点と内容が不明だが鉄製品が 1 点出土している。一方、磨製石斧などの石器も出土しており、鉄器と石器の共存が明らかになっている。このことから下寺尾西方遺跡は南関東における石器の終末と鉄器の出現の移行期の様子を知ることができる遺跡と言える。鉄斧は竪穴住居から出土しており、科学分析の結果、大陸の鉄鉱石を原料にした鉄素材を鍛造によってつくられたものとされ、鉄製品の流通や技術の伝播などを知る上で重要な資料である。また、こうした鉄斧や磨製石斧などの木工具の存在は、遺跡内で木製品製作が行われていた可能性を示している。さらに、石器・石製品の中には勾玉や磨製石斧の未成品が確認されていることに加え、敲打具~~の~~(敲石)などの存在も明らかになっており、下寺尾西方遺跡において石器・石製品の製作が行われていたことも示している。特に大型の勾玉未製品は出土事例が少なく貴重な資料である。こうした内容から、石器と鉄器の併存の様子に加え、木製品や石器・石製品の生産機能を有する遺跡の様相を知りえる遺跡として評価できる。

5 景観を復元することが~~可能な~~できる遺跡

下寺尾西方遺跡は、環濠集落の内容を示す多くの遺構や遺物が現状保存されている遺跡である。加えて遺跡が立地する地形環境も大きな改変を受けておらず景観が保全されている。こうしたことから周辺地域も含めて往時の環濠集落の景観を復元することが可能である。また遺跡が立地する台地は東側を除き、北側、西側、南側を河川が流れており、舌状に延びた台地は近傍より高く、往時は本環濠集落を周辺から認識することができたと思われる。したがって集落域に加え、周辺に展開する~~であろう~~と思われる墓域や生産域も合わせた環濠集落を取巻く景観を想定することもできる。このように環濠集落を取り巻く環境、地形、空間など弥生時代の景観復元が可能な遺跡として評価できる。

6 遺跡の重層的な在り方から、環濠集落を中心とした地域の歴史的な変遷を知ることができる。

下寺尾西方遺跡を内包する下寺尾遺跡群には、弥生時代中期の環濠集落のほかに複数の時代の遺構が存在する。具体的には相模湾岸では数少ない縄文時代前期の貝塚である西方貝塚と集落の存在、弥生時代末から古墳時代初頭の集落、また古代においては相模国高座郡の高座郡家や下寺尾廃寺および関連する施設や祭祀場、さらに土地利用の変化を把握できる中世の区画遺構などである。これらの複数の時代の遺構は、一見すると弥生時代遺跡との関係は希薄~~と考えがち~~のようであるが、環濠集落が構築された土地の地形や利用の変遷を知ることができるほか、環濠集落として当該地が選地された背景を考える上で欠くことができないものと思われる。